



北見市常呂町の常呂川河口からサロマ湖まで、オホーツク海沿いの東西8.6kmに広がる国指定史跡・常呂遺跡。4地区があり、このうち常呂川河口付近の東側にあるトコロチャシ跡遺跡群では、9千～8千年前の縄文時代早期から18世紀ごろのアイヌ文化期の遺物が出土しています。今年4月から一般公開されたチャシ跡遺跡群に、こども記者2人が訪れました。(佐藤菜々子)

こども記者見ぶん録

アイヌ民族のとりで 祈りの場にも



復元された竪穴住居内で、しゅりよう道具について中村さん(右)から説明を聞く、こども記者の立花さん(左)と吉田さん(いずれも館山国敏さん)

オホーツク管内美幌町・旭小6年の立花燈馬さんと網走市・網走小6年の吉田美里さん。「北見市と遺跡の森」学芸員の中村雄紀さん(46)が案内してくれました。チャシはアイヌ民族が築いたとりです。チャシ跡遺跡群はアイヌ文化の竪穴住居は、四角形や円形の縄文時代と異な

トコロチャシ跡遺跡群 一般公開

復元された竪穴住居「広い」



チャシ跡にある竪穴住居跡を見学する、こども記者ら

り、六角形なのが特徴です。吉田さんは「さまざまな形があるんだ」と興味深そう。復元された、奥行き12m、横8m、高さ約4mの住居内に入った2人は「とても広い」とおどろいた様子。中村さんは「一つの住居に複数の家族で住んでいたと考えられています」と説明しました。住居内の祭壇に、手のひらサイズのヒグマの彫刻品や頭蓋骨の複製品が並べられていました。チャシには争いごとの際に敵の侵入を防ぐ役割もあるといいますが、ほりややくは一つしかなく、中村さんは「戦いというより、お祭りや神様にお祈りした場所として使われていたとされています」と話しました。立花さんは「簡単にさくの間から入れそうなので、身を守るの



トコロチャシ跡遺跡群は入場無料。公開は11月末までの予定で、冬季は閉鎖します。JR北見駅から車で約45分。問い合わせは北見市と遺跡の森、電話0152・54・3393へ。

は難しそう」とうなずいていました。

出土品からふくらむ想像 大島1遺跡発掘調査

常呂遺跡のうち、常呂川と能取湖の間に位置する擦文時代(7～13世紀)の大島1遺跡では、東京大学の学生らが2017年から発掘調査を続けています。8月中旬～9月下旬の調査の様子を、こども記者の2人が取材しました。

調査の場所は11世紀ごろの住居跡。学生約15人が、遺跡の建物跡を測量して図面に書き写すなどの作業をしていました。

「この黒いものは何? シカのふんみたい」と2人が興味を示したのは、土にまざった炭化木材です。調査の責任者で東大大学院教授の熊木俊朗さん(58)が「引っこしをする時に住居を焼いて、残ったものだ」と解説。死者があので住むための家を送る、アイヌ民族の儀式「家送り」が行われていたのでは



ないかとされています。住居跡の一部には、赤茶色になった土もありました。「かまどが置いてあったのではないかと想像できるんだ」と熊木さん。立花さんは「いつか自分も発掘調査してみたい」、吉田さんは「自分が住むオホーツクに、こんなにたくさんの遺跡があったなんて」と目をかがやかせていました。

大島1遺跡では東大の学生らによる発掘調査が行われていました